

多様な学び方を用意した「思考を働かせる」授業で 生徒が「対話や学習をしたくなる」ことをめざす

教師の指示で生徒が表面的にアクティブになるのではなく、生徒自身が目の前のことを深く考えたいと思い、みんなとも対話したいと思うような授業はできないだろうか？ その理想をめざす先生の実践をご紹介します。

取材・文／松井大助
 撮影／西山俊哉



地理歴史科
皆川雅樹先生

1978年生まれ。専修大学附属高校で、2010年より日本史のアクティブラーニング型授業に取り組む。同時にチームビルディング・ファシリテーションスキル教育にも取り組み、学校での選択授業のほか、校外での講師も担当している。歴史研究者でもあり、著書に『日本古代王権と唐物交易』(吉川弘文館)がある。

授業の進め方やめざすことを 3コマ使ってガイドス

専修大学附属高校、皆川先生の日本史の授業は、4月に3コマ使ってガイドスをするところから始まる。

初回は「皆川の授業がめざすものは？」という問いを掲げてのガイドス。

皆川先生が、自分の趣味から授業方針までを盛り込んだYES・NOクイズをプリントで配り、生徒が挑戦。その答え合わせの中で授業のポイントにもふれていく。

「皆さんに『学び家』になってほしい、そんな目的をもって授業をしていきます。教わるばかりの『教わり家』の逆ですね。なぜだろう、どうすればいいだろう、と自分で考える人になってほしいのです」

「皆さんがアウトプットする場もいっぱいつくりたいです。クラスメートや私に対して。内容の質も伴うとよいですが、まずは『質よりも量』。自分の思いをたくさん吐き出すことを大切にしていきます」

その宣言どおり、初回のガイドスも、最後は「授業がめざすものは？」の問いに、生徒全員が自分なりの答えをプリントにできるだけ書き出し、写真のように1対1で皆川先生に見せて終わった。このスタイルは今年度からの新たな試みだという。授業で何を学んだかを「個人の中に漠然としたまま閉じ込めず、外に出そうとすることで生徒が自分の思考をより働かせること」と、「思考したことを見える化し、たくさん考えたその実感から生

徒の自信が高まること」を狙っている。2回目、3回めのガイドスのテーマは、「なぜ歴史を学ぶのか？」。これらの回も、講義や生徒同士の対話のあと、各自が問いへの答えを皆川先生に見せる展開となった。ガイドスは生徒にとって、授業方針を理解すると同時に、左のような授業のスタイルに慣れる準備期間でもあるのだ。

■ 皆川先生の日本史：1時間(50分)の基本的な流れ(アクティブラーニング型)

<p>①【講義】学習内容との対話1(KP法+板書)……[10分] 「本日の問い」の提示、本日扱う単元内容について説明</p> <p>②【作業】学習内容との対話2……[5分] 基礎知識の確認作業</p> <p>③【学習】学習内容との対話3+仲間との対話……[15分程度] 本日の事柄のつながりや応用を学び合う</p> <p>④【試験】自己との対話……[5分程度] ①・②・③で学んだ内容の試験(選択&つぶやき)→答え合わせ</p> <p>⑤【メタ認知】自己との対話2+担当者との対話……[15分程度] 「振り返り&“質よりも量”シート」記入→担当者との対話(OKが出たら終了！)</p>	<p><授業の目的> “学び家” (アクティブラーナー) (“教わり家”は×)</p>
	<p>②・③：1チーム2～6人 *教え合いOK! *時にはひとりでも考え込むのもOK!</p>

流れをまとめたこの記述は、授業で配るプリントにも毎回掲載されている。生徒からすれば、次に何をするのか見通せて、速やかに行動できる利点がある。「学び家」になるという授業の目的を、常に生徒に意識してもらおうためのしかけでもある。

**思考を働かせる場にする事で
対話が生まれることも狙う**

ガイダンス後、初の授業は旧石器時代から縄文時代の学習。皆川先生は「本日の問い」を板書して生徒に投げかけた。「地球の温暖化は日本列島の人々にとってどんな影響を与えたか？」

まずは皆川先生がKP法(左上写真参照)を使い、旧石器時代と縄文時代の遺跡や、生活の変化について講義した。

続いて生徒の作業と学習の時間となる。皆川先生の呼びかけで、1:3:5列めの生徒が机ごと後ろを向き、全員が前と左右の机をくっつけ、長机が3つあるような状態にした。その状態で、生徒達が基礎用語をプリントに漢字で書いて確認。次いで教科書の、太字の用語ではない箇所が空欄になったプリントを、教科書を読み込んで穴埋めした。



KP法(紙芝居プレゼンテーション法)では、伝えたいことを項目ごとに整理し、各項目のキーワードを記した用紙を、貼り出しながら説明する。

「用語ではない箇所の穴埋めにしたのは昨年からです。用語の穴埋めは、教科書からそこをピックアップするだけになり、思考が働いていない」と思いました。用語の前後の穴埋めだと、生徒が教科書を読み込んで内容や関係性をよく考えないといけません。教科書という専門家ともっと対話してほしいのです」

作業と学習の時間は「教え合いもOK」で、皆川先生も巡回しながら「わからないところはまわりに訊いてください」「できた人は苦勞している人を助けてあげてください」と促す。ただ、その声はソフドで強制する感じではないので、この日は教え合いはほとんど起こらなかった。



講義のあとは教科書との対話。長机にみんな座る状態です。前・横・斜めと、仲間との対話もしやすい環境にしている。

「チームで考えることを、最近是指示してやらせようとはしていません。それよりも、人間って、思考を働かせていろいろなことを考え、その考えに自信が出てくるほど、必然的に誰かに話したくなると思

うのです。昨年も学期の中盤から、自然に話をする生徒が増えました。仲間と対話はしてほしい。でも、その対話しようとする動機は、生徒の内側から生まれるものであってほしいです」

学習したことは、5分でできる〇×問題の小テストでその授業のうちに確認。

さらに振り返りシートで、生徒おのが、授業に「学び家」として臨めたか、自分の学習活動を振り返り、本日の問いへの答えを書くことで、学習内容も振り返った。そしてシートを生徒から手渡された皆川先生が「なるほど」「そうかもしれない」などと返す。順番待ちで一列に並んだ生徒達は、ほかの生徒がどんなことを書いたのかも気になったようだ。



終盤の自己との対話では、学び家でいられたかという「学習活動」と、今日の授業の「学習内容」を、シートの記入で振り返る。

ちなみに、昨年行ったゲスト講師による特別授業では、コンビニエンスストアの売上UP作戦を生徒が考え、やはり講師に一人ずつ見せたという。すると、順番待

ちの生徒同士で自然と情報交換が始まり、会話が止まらなくなった。皆川先生がめざすのはその状態だ。日本史の授業でも、生徒がこのやり方に慣れ、また、毎回「生徒が親近感をもてる問い」を投げかけ、全員がたくさん思考する環境をつくれたなら、生徒の自然発生的な対話を生み出せるのではないかと考えている。

**生徒が自分に合った学び方を
自分で見つけられるように**

ところで、皆川先生は授業で使うプリントの裏面に、予習・復習の情報も載せている。学習内容のまとめとなる文章や図版参考になるインターネット動画のQRコードなどだ。だが、それらを見ておくように生徒に強制することはしない。

また、授業用の穴埋めプリントも、実は「無理してやらなくてよい」というスタンスでいる。まずはやってみて効果を感じてほしいが、何回か授業を行うと、どのクラスでも、合わないと訴える生徒が出てくる。その時点で「小テストや問いへの答えがきちんとできるなら、教科書に線を引くだけでもいいし、自分のやりやすい方法でいいですよ」と伝えるのだ。

「生徒が学習内容の理解に努め、よく考えることをしているなら、やり方はなんでもいとおもっているんですよ。生徒には、物事を言われたとおりに学ぶのではなく、自分の学びのスタイルを自分で見つけてほしいと思っています」

専修大学附属高校(東京・私立)



School Data

普通科/1929年創立
生徒数(2014年度)1235人(男子627人・女子608人)
進路状況(2014年度実績)
専修大学342人・他大学63人
専門学校8人・受験準備9人
東京都杉並区和泉4-4-1
TEL 03-3322-7171
URL <http://www.senshu-u-h.ed.jp/>

Outline

早稲田商業高校の姉妹校として、1929年に京王商業高校として新設され、1955年に専修大学の附属校となった。例年、生徒の80%以上が専修大学に進学。その専修大学との連携にも力を入れており、生徒が大学キャンパスで授業を受けられる機会や、大学と連携した資格講座やシンポジウムを用意している。一方で2割近くの生徒は他大学や専門学校に進学しており、そうした生徒への進学・受験サポートも行っている。



HINT & TIPS

1 生徒が、対生徒・対教師・対外部にアウトプットして思考を深める機会をつくる

生徒同士の対話、教師との対話、文書での意見表明など。皆川先生は、頭に浮かんだことを言語や絵でアウトプットする、というプロセスを授業の中に増やすことで、生徒があれこれ思考を働かせるのを後押ししている。その思考力が、物事を理解・分析し、今後に生かしていく土台になると考えるからだ。

2 グループワークを「させる」のではなく生徒が対話したくなるしなを重視する

生徒同士の対話は、思考を深め、仲間と課題に取り組む体験にもなる。だが、対話しろと言うのでは生徒はやらされるだけになる。皆川先生は、生徒の発信をまず自分が受け止めて褒めたり、あえて時計回りで意見を回して意見が周囲に受け入れられる機会を設けたりして、生徒の対話への意欲を高めている。

3 授業で学ぶ歴史の用語・知識についてどんな意味をもつか考えたい問いを出す

旧石器時代と縄文時代の生活様式を学ぶときに「温暖化はどう影響したか」を問うなど、授業では生徒がただ歴史の用語や知識を覚えようとするのではなく、その習った知識をもとに物事の因果関係や対比まで考えることをめざす。知識を活用することを学ぶ、そのほうが知識を習得しやすくなるからだ。

4 授業の目的・目標・評価方法を明確にして生徒にもはっきりと示しておく

ガイダンスで皆川先生は、授業の目的を「学び家になる」と掲げ、そこに向かうための目標も、初回配付のプリントで明示（「社会がどのように変化したかをつかむ」「自ら歴史の事実を調べる力をつける」など）。目標を達成できたかどうかは「試験」や「質より量シート」などでみると評価方法も伝えている。

授業ができるまで

完璧な授業と褒められたのに自分に手ごたえはなかった

皆川先生は、学生時代は歴史学を専攻し、将来は歴史研究をしたいと考えていた。そんなおり、大学院生のときに、3年任期となる私立高校の特別教諭の仕事で教授から打診される。研究者が専門的に通る道の一つだったので、皆川先生はこの話を引き受け、院生のまま教諭になった。それが教師生活の始まりだ。初任校には、歴史学の教育的な視点をしっかりともった先生達が出て、自分の

視野のせまさを思い知らされたという。

「専門家でも生徒でも、歴史を学ぶときは、ある時代の一点だけを見つめたものでは物事を十分に理解できない。過去から今につながる全体を俯瞰して考えることも大事なんだ」と意識させられました」

歴史教育の魅力にもふれた皆川先生は、博士課程を修了後、歴史研究は続けつつ、職業としては教師の道を選び、母校である専修大学附属高校で働くことになった。

ところが、そこから迷いが生じていく。当時の授業はトーク&チョーク。説明や板書を工夫し、歴史研究の最新情報を盛り込み、学習内容の充実に努めてはいた。だが歴史好きの生徒は楽しそうでも、

なかには居眠りをする生徒もいて、皆川先生はこれでいいとは割り切れずにいた。「そんなときに、授業見学にきた教員志望の学生から『先生の授業は完璧ですね。わかりやすい』と言われ、ひっかかったのです。『完璧な授業』なんてあるのか。生徒にとって『良い授業』とはなんなのか」

同時期に、学校のキャリア教育の担当になったことも、授業への疑問を強めた。「私の授業で学んだことを、歴史の専門家になる以外の生徒が、将来、社会で生かしていけるという実感をもてなかったのです。なんのための授業なんだろう、と」

そこで皆川先生は、キャリア教育のことをもつと学んでみることにした。2010年春から半年ほどは、週1〜2回のペースで、校外の勉強の場に足を運んだ。

その中で出会ったのが、社会に出てからも自分で学び続けられるような力を育てる、アクションラーニング（質問会議とも呼ばれる）や、アクティブラーニング（能動的学習）だった。皆川先生の中で「授業は静かに受けるもの」というイメージは崩れ、「授業に生徒が主体的に参加する」ことを志向しはじめる。そして2010年の2学期に、先進の実践例を参考に授業のやり方を一気に転換した。教師が一方的に話す授業から、生徒がほかの生

授業改革で実現したことと見えてきたその先の課題

徒や教師と対話しながら学ぶ授業に、だが、当初は生徒に戸惑う様子も見られたが、効果はたしかに感じられた。



アクションラーニングを学んだ皆川先生は、校内で、その要素を取り入れた「チーム・組織を考える」という選択授業も開設した。

「生徒が授業中に寝なくなっただけでなく、対話を心がけていくと、前から積極的だった生徒だけでなく、いろいろな生徒の声が増えるようになったのです。生徒の授業への参加度が高まりました」

ただし、別の課題も見えてきたという。「生徒の行動はアクティブになりましたが、『思考が働いているか』というと、必ずしもそうではなかったのです。どうすれば思考がアクティブになるか、今はそこに挑戦しています。授業のやり方を変えてからここ5年ほど、手ごたえはあっても、うまくいったと思ったことは一度もありません。こうすればもっとよくなるのでは、とモヤモヤしてばかり（笑）。生徒の反応や成果を見ながら、学期ごとに新たな試みをするのが続いています」

生徒はこう変わる

主体的に学ぶほど意欲は高まり
クラス全体の成績も上がる



自分達で答えを探るから
記憶にも残りやすい

専修大学2年生
中原裕樹さん

高校生のときに皆川先生に日本史を教わり、成績も伸びたのですが、それは生徒同士で話し合っただけで学習する授業だったからだと思います。先生が話すだけだとつい聞き流しちゃうのですが、皆川先生の授業は、自分達で答えを探さなければならず、否が応でも記憶の片隅に残るのです。その経験が一番生きたのは、実は大学生になってからでした。いろいろな授業を、自分なりに興味をもってから受けるようになり、前より学ぶことを吸収しやすくなりました。皆川先生の選択授業でチームについても学んだのですが、そこでみんなで考えるおもしろさを知り、今は学園祭の実行委員を務めたり、リーダーシッププログラムに参加したりもしています。



教員同士の会議が、
めざしたい授業のヒントに

英語科
米元洋次先生

教員志望の学生時代から、教え込みではもうダメではないか、生徒が自分で学ぶような場をつくれないうか、とは思っていたんです。ですが、やり方もわからず、教員1年めは一般的な講義の授業をしていました。その中で、皆川先生が立ち上げたキャリア教育推進委員会のメンバーとなり、ファシリテーターのいる会議を経験したのです。参加者からまんべんなく意見が出て、場も盛り上がりました。みんなが主体的になるってこういうことじゃないか、とすごく腑に落ちて、それが授業ともつながったんですね。教科は違いますが、皆川先生の授業の流れとプリントを参考に、英語用にアレンジして、2年めの途中から授業を切り替えました。

授業の参加度が高まると、成績にも好影響が生まれる。授業スタイルに生徒が慣れるにつれ、定期試験の平均点がUPするのだ。特に日本史が苦手な生徒の点数が10点前後上がるという。「自分で勉強した感覚があり、試験も捨てたくなくなるのでは」と皆川先生はみている。

授業へのアンケートでは「わからないところをほかの人と協力して学べる」「人に教えると自分の理解も深まる」など、対話の効果を実感している生徒も多い。

「一方で、「もっと解説してほしい」という声もやはり出る。この点については「生徒にそう思わせたら私の失敗だと考えています。わからないことや知りたいことは、提供されるのを待つのではなく、私やほかの人に質問したり、独自に調べたり、自分でつかみ取ってほしい。その方向にもついでにあげたいです」

現在、アクティブラーニング型の授業は学校内に広まりつつある。皆川先生の同僚もこの分野に注目し、お互いに授業改革を進めてきたからだ。加えて、よい契機となったのは、生徒の主体性を引き出すと「ファシリテーション」も学んだ皆川先生達が、それを校務分掌の会議でも生かした点だ。一人ひとりの意見を引き出し、全員で目的に向かうための場づくり

もする、いわゆるファシリテーター役を、皆川先生達が実践した。次いで輪番でほかの先生にも任せていった。その中で、「場づくりを工夫すれば一人ひとりがより主体的になれるんだ」と実感した先生が、自分の授業を見直すようになったのだ。

皆川先生はそうした先生達とも協力して、教師と生徒がネット上でつながる教育SNS「Edmodo」の利用や、講義を映像化して生徒が活用できるようにすることなどにも取り組むようになっている。

「授業への参加の仕方や、勉強の仕方などは、いろいろなやり方があると思うのですが、その多様性をなるべく提供することで、生徒が自分に合うものに自分で気づき、それぞれが主体的に学んでいけるような場を、実現できればと思っています」



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	<p>生きるうえでのパーツとしての知識</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会の変化をつかむための史実に基づく知識 アジアの中での「日本」を考えるための知識 日本が直面している課題を歴史的に明らかにし、解決する方向性を見定めるための知識 <p>※上記のような視点を授業の「本日の問い」で投げかけ、生徒が歴史を学びながら、その知識をパーツとして活用して思考も深めていく</p>	<p>思考力</p> <ul style="list-style-type: none"> 穴埋めプリントなど、生徒が自ら文章を読み込んだり調べたりして理解を深める機会を増やす 対話や文書提出を通して、生徒が感じたことや浮かんだことを形にするところまで思考する <p>聴く力・訊く力・対話する力</p> <ul style="list-style-type: none"> 話を聴く、質問する、対話して考えを深めることが大事と位置づけて、グループで活動する 	<p>主体的・積極的に学ぶ姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> 主体的・積極的に学ぶ「学び家」になるという授業の目的を最初に掲げ、毎授業、最後に生徒が学び家として活動できたかを振り返る 対話しやすい場、穴埋めプリントや読み物プリント、参考になる映像、教育SNSなどを用意し、生徒がさまざまな学び方を体験しながら、自分の学びのスタイルを築けるようにする
その力が将来にどう生きる?	<p>職業人や市民として知識を活用できる物事を俯瞰して総合的に考えられる</p> <ul style="list-style-type: none"> 行政やビジネスで課題に取り組むときや、市民として地域社会にかかわるときに、目の前で起きていることだけで短絡的に物事を判断せず、過去から現在に至るまでの流れや、国際社会における自分達の立場なども踏まえて、意見をまとめることや、行動することができる 	<p>自分で課題の発見や解決をしていける</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分で情報を整理して仕事や私生活の課題をはっきりさせたり、必要なことを自分で調べて、課題の解決策を考えたりしていける <p>他者と協働して課題解決をめざせる</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会・組織・家族の課題などについて、相手の意見を聞き出し、自分の考えもきちんと表明して、議論を深めながら解決策を考えていける 	<p>知識基盤社会で活躍していける</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会の変化が早く、仕事でも地域社会でも従来の手法をただ踏襲するのではなく、自分達でよりよい道を探らなければいけなくなった現代において、常に学び続け、知識を創造していける <p>自分らしく物事を学習していける</p> <ul style="list-style-type: none"> 歴史だけでなく、受験全般も社会人になってからの勉強も、自分に適した方法で学んでいける